



《原著論文》パーソナリティ障害と顕在的-潜在的 自尊感情間の乖離との関連

著者	市川 玲子, 望月 聡
雑誌名	心理学研究
巻	86
号	5
ページ	434-444
発行年	2015
権利	公益社団法人日本心理学会 The Japanese Psychological Association
URL	http://hdl.handle.net/2241/00145585

doi: 10.4992/jjpsy.86.14036

パーソナリティ障害と顕在的-潜在的自尊感情間の乖離との関連^{1, 2}

市川 玲子^{3, 4} 望月 聡 筑波大学

Relationships among borderline, narcissistic, and avoidant personality disorders and the discrepancy between explicit and implicit self-esteem

Reiko Ichikawa and Satoshi Mochizuki (*University of Tsukuba*)

Personality disorders (PDs) are considered mental disorders due to a pathology of self (Lynum et al., 2008). In order to capture the multi-levels of self-concept, we investigated both explicit and implicit self-esteem. This study aimed to understand the relationships among borderline, narcissistic, and avoidant PDs and the discrepancy between explicit and implicit self-esteem. Eighty-five undergraduates and graduates completed a questionnaire and self-esteem implicit association test measuring implicit self-esteem. The questionnaire included items about PDs and explicit self-esteem. The results of hierarchical multiple regression analyses indicated that borderline and avoidant PDs could be explained by a large discrepancy between two levels of self-esteem when implicit self-esteem is relatively higher than explicit self-esteem. On the other hand, narcissistic PD was not related to each level of self-esteem individually or the discrepancy between these self-esteem. These results suggest that borderline and avoidant PDs are related to discrepancies among multi self-concepts, but narcissistic PD cannot be explained by discrepancies in self-esteem.

Key words: personality disorders, implicit self-esteem, explicit self-esteem, discrepancy, self-concept.

The Japanese Journal of Psychology

2015, Vol. 86, No. 5, pp. 434–444

J-STAGE Advanced published date: September 15, 2015, doi.org/10.4992/jjpsy.86.14036

DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル (American Psychiatric Association, 2013 高橋・大野監訳 2014) において、パーソナリティ障害 (以下 PD とする) は“そ

の人が属する文化から期待されるものから著しく偏り、広範でかつ柔軟性がなく、青年期または成人期早期に始まり、長期にわたり変わることなく、苦痛または障害を引き起こす内的体験および行動の持続的様式 (American Psychiatric Association, 2013 高橋・大野監訳 2014, p. 635)”と定義されている。この持続的様式は、認知 (自己, 他者, 出来事を知覚し解釈する仕方), 感情性, 対人関係機能, 衝動の制御の 4 領域のうち, 2 領域以上で現れることとされている (American Psychiatric Association, 2013 高橋・大野監訳 2014)。Bornstein, Bianucci, Fishman, & Biars (2014) は, PD の診断基準における認知と対人関係機能に関する項目の割合の高さを示している。このことから, 自他に対する認知や対人関係機能における障害が PD 概念の中核を成しているといえる。本研究では, このうち自己認知の一側面である自尊感情に焦点を当てて検討を行う。

Correspondence concerning this article should be sent to: Reiko Ichikawa, Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba, Tennoudai, Tsukuba 305-8572, Japan (e-mail: ichikawa@human.tsukuba.ac.jp)

¹ 本論文は, 2012 年度に筑波大学大学院人間総合科学研究科に提出した修士論文の一部を再分析したものである。また, 本論文の内容は日本心理学会第 78 回大会 (2014 年) において発表された。

² 本研究は, 筑波大学人間系研究倫理委員会の承認を受けて実施された。対象者には, 研究への参加は自由意思に基づき, 参加しなくとも何ら不利益は生じないことを口頭と書面で説明し, 質問紙への回答は無記名で行われた。

³ 本研究の実施および本論文の執筆にあたり, 村上 達也先生 (筑波大学) に多大なるご支援・ご指導を賜りました。記して御礼申し上げます。

⁴ 日本学術振興会特別研究員

PD と自尊感情

PD は“自己 (self) の病理”であるとされ、特に自己の主観的経験において重要な側面である自尊感情と密接な関係があることが示されてきた (Lynum, Wilberg, & Karterud, 2008)。これまでに Watson (1998) など多くの研究で各 PD と自尊感情との負の相関が示されており、否定的な自己認知が PD 様のパーソナリティの不適応的な偏りに強く影響していることが考えられている (市川・望月, 2013)。

自尊感情は、“自己に対する肯定的あるいは否定的な態度 (Rosenberg, 1965)”, “自己概念と結びついている自己の価値と能力の感覚 (遠藤, 1992)”などと定義され、古くから様々な社会的相互作用の産物であると考えられてきた (Rosenberg, Schooler, & Schoenbach, 1989)。つまり、日常的に経験される社会的相互作用の結果として自己概念が形成され、自尊感情はそのうちの評価的感情を含む一側面であるといえる。そして、自尊感情が他者や環境との相互作用過程において形成されることは、これまでに Leary & Downs (1995) や McNulty & Swann (1994) など、多くの研究者が主張・実証してきた。これらのことから、自尊感情は自己概念や自己の主観的経験における重要な側面である (Kernis, 2003; Lynum et al., 2008) とともに、対人関係上の経験を反映した概念でもあるといえる。

DSM-5 (American Psychiatric Association, 2013 高橋・大野監訳 2014) では全 10 類型の PD が定義されているが、このうち自己に関する診断基準が含まれているのは境界性 PD、自己愛性 PD、回避性 PD である (Lynum et al., 2008)。具体的には、境界性 PD には“同一性の混乱：著明で持続的に不安定な自己像または自己意識 (American Psychiatric Association, 2013 高橋・大野監訳 2014, p. 654)”という診断基準が含まれている。これは、目標や価値観に基づく自己概念が、しばしば突然かつ劇的に変化する様相を指し、一般的に青年期に直面しうる心理社会的危機としての同一性拡散 (Erikson, 1950, 1963) とは明確に区別される (American Psychiatric Association, 2013 高橋・大野監訳 2014)。Wilkinson-Ryan & Westen (2000) は、この同一性の混乱の程度が境界性 PD 患者と他の精神疾患の患者を区別することを明らかにしている。つまり、境界性 PD の個人の自己概念は通常否定的なものである (American Psychiatric Association, 2013 高橋・大野監訳 2014) が、その一方で複数の自己像が存在することで混乱が生じ、より強い精神的苦痛を伴うことが、境界性 PD の特徴であると考えられる。

自己愛性 PD には、“自分が重要であるという誇大な感覚 (American Psychiatric Association, 2013 高橋・大野監訳 2014, p. 661)”という診断基準が含まれている。他方、その誇大な感覚に基づいた自尊感情は非常

に傷つきやすいことや、他者からの賞賛を過剰に求め、その賞賛欲求が満たされなかったときには当惑するか激昂することも特徴である (American Psychiatric Association, 2013 高橋・大野監訳 2014)。この背景要因として、自己愛性 PD の背景にある恥 (shame) の強さが挙げられる (Ritter, Vater, Rüscher, Schröder-Abé, Schütz, Fydrich, Lammers, & Roepke, 2014)。自己愛性 PD 患者は、顕在的な恥特性は境界性 PD 患者よりも低い一方で、境界性 PD 患者や非臨床群と比較して潜在的な恥特性が強いことが示されている (Ritter et al., 2014)。Ritter et al. (2014) は、自己愛性 PD における誇大性と脆弱性は、自尊感情の調節不全によるものであり、潜在的な低い自尊感情が意識に上ることを防ぐことで良い自己表象を維持しようとして表れる症状であると考察している。これらのことから、誇大性を主な特徴とする自己愛性 PD の背景には否定的な自尊感情の存在が考えられる。

回避性 PD には、“自分は社会的に不適切である、人間として長所がない、または他の人より劣っている”と思っている (American Psychiatric Association, 2013 高橋・大野監訳 2014, p. 664)”という診断基準がある。そして、このような自尊感情の低さが社会的場面や対人場面における制止に繋がっていると考えられている (市川・望月, 2014a)。また、回避性 PD における自尊感情の低さが他者に対する服従性の高さに寄与していることも示唆されている (Leising, Sporberg, & Rehbein, 2006)。その一方で、回避性 PD の特徴を示す大学生群は、質問紙で測定される顕在的・意識的な自尊感情はそうでない大学生群より有意に低いものの、潜在的・無意識的な自尊感情については差が見られていない (Gang, Fan-Min, Wen-Qing, & Ming, 2011)。このことは、回避性 PD における自尊感情の低さは自己に深く内在化されたものではなく、自己防衛のために表出されているものである可能性を示している。そして、自己防衛のために過度で不適応的な回避傾向を示すことが回避性 PD の特徴であると考えられる。

以上三つの PD は、否定的自己概念と関連する点で概念的にオーバーラップしていることが明らかにされている (市川・望月, 2014b)。その一方で、自己愛性 PD は、強い自己肯定感を示し、注目や賞賛を得ることでその自己肯定感を維持しようとする特徴も含んでおり、この点において境界性 PD や回避性 PD とは異なっている (市川・望月, 2014b)。このことから、境界性 PD・自己愛性 PD・回避性 PD における自尊感情の特徴の詳細な比較検討が必要であるといえる。

Rosenberg (1965) が作成した自尊感情尺度によって測定される自尊感情と境界性・回避性 PD については、一貫して負の関連が示されている (市川・望月, 2014c; Watson, 1998) が、自己愛性 PD との関連は明確ではない。一般的なパーソナリティの一次元である

自己愛性人格は、自尊感情の高さや精神的健康との正の関連が示されているが (Sedikides, Rudich, Gregg, Kumashiro, & Rusbult, 2004), 誇大性を主な特徴とする自己愛性 PD は脆弱な自尊感情を背景に持つとされている (American Psychiatric Association, 2013 高橋・大野監訳 2014)。自尊感情は、Rosenberg (1965) の自尊感情尺度を用いて測定されることが多いが、これは主に顕在化 (意識) された自尊感情を反映している。したがって、PD と関連した複数の自尊感情を捉えるためには、自尊感情を複数の水準の観点から同時に測定する必要がある。

潜在的自尊感情

ここで、顕在化された自尊感情の背景にある自尊感情を表す概念として、潜在的自尊感情 (implicit self-esteem) を挙げる。Greenwald & Banaji (1995) は、これを“自己に連合した、あるいは自己に連合していない対象への評価に基づいた、内省的に同定できない (あるいは正確に同定できない) 自己への態度の効果”と定義した。質問紙によって測定される顕在的自尊感情は意識的な自己に対する行為、自己価値、自己受容といった感覚を反映する。他方で、潜在連合テスト (Implicit Association Test: 以下 IAT とする, Greenwald, McGhee, & Schwartz, 1998) などにより測定される潜在的自尊感情は、非意識的で自動的、継続的かつ過剰に学習された自己評価を反映したものである (Zeigler-Hill, 2006)。自尊感情は、顕在-潜在間の相関が低いことが、Greenwald, Banaji, Rudman, Farnham, Nosek, & Mellott (2002) などの研究により繰り返し示されている。これは、質問紙で測定された顕在的な自尊感情は自己呈示方略の影響を強く受けたものであり、必ずしも内在化・自動化された自己に対する肯定的な感情を測定していないことによるとの見方が強い (潮村・村上・小林, 2003)。したがって、PD と自尊感情との関連においても、顕在レベルだけでなく潜在レベルの測定も同時に行うことで、顕在化している自尊感情の背景にある異なる水準の自尊感情についても検討する必要があるといえる。

顕在的自尊感情と潜在的自尊感情間の不一致

Wilson, Lindsey, & Schooler (2000) は、人間が一つの対象に対して顕在的態度と潜在的態度の二つの態度をもつと仮定した (二重態度モデル)。このように、近年は人間の思考や感情や行為には意識的な過程と無意識的な過程の二つの過程があると考えられている (岡部・今野・岡本, 2003)。そして、Vater, Schröder-Abé, Schütz, Lammers, & Roepke (2010) などいくつかの先行研究で、顕在的-潜在的自尊感情間の不一致は不適応状態に結びつくことが一貫して示されている。これは、顕在的-潜在的自尊感情間の不一致は心理的

葛藤 (Petty, Tormala, Briñol, & Jarvis, 2006) や、強い不快感として経験される不安 (Cockerham, Stopa, Bell, & Gregg, 2009) を引き起こすためであると考えられている。境界性 PD や自己愛性 PD、回避性 PD の背景に、顕在化された自尊感情とは異なった潜在的・無意識的な自尊感情が存在しているのであれば、顕在的自尊感情と潜在的自尊感情の不一致によってこれらの PD を説明可能であると考えられる。

PD と顕在的-潜在的自尊感情との関連については、いくつかの先行研究で検討されてきた。Vater et al. (2010) は境界性 PD 患者を対象に検討し、顕在-潜在のいずれの自尊感情も低い患者よりも、顕在的自尊感情が低く、潜在的自尊感情が高い患者の方が重篤な症状を示すことを明らかにした。この結果は、境界性 PD の症状の背景に、顕在化した否定的な自尊感情と無意識的で肯定的な自尊感情が併存していることを示すものと解釈できる。

自己愛性 PD についても Vater, Ritter, Schröder-Abé, Schütz, Lammers, Bosson, & Roepke (2013) が同様の検討を行い、顕在的自尊感情が低く潜在的自尊感情が高いというパターンの自尊感情の不一致が自己愛性 PD の重篤さと関連していることを示した。この結果から、Vater et al. (2013) は、自己愛性 PD の理解に向けて自尊感情を顕在-潜在という複数の観点から捉えて検討することの必要性を説いた。しかし、Vater et al. (2013) の知見は、自己愛性 PD が潜在的な恥の強さと関連するという Ritter et al. (2014) の知見とは相反するものであるため、さらなる検討が必要とされる。

先行研究の問題点と本研究の目的

Vater et al. (2010, 2013) のいずれの研究でも、顕在的-潜在的自尊感情の各得点と交互作用項を用いた階層的重回帰分析を行い、片方の自尊感情が高 (低) く、もう一方が低 (高) いことを“自尊感情の不一致 (discrepancy)”としている。このような階層的重回帰分析や、顕在的-潜在的自尊感情の各得点の高低を要因とした 2 要因分散分析は、顕在-潜在間の態度や特性の不一致が何らかの心理的変数を説明することを検討する手法として、藤井 (2014) など多くの先行研究で用いられている。しかし、これらの分析では、両高 (低) 群にも自尊感情間の乖離⁵が大きい者が含まれてしまう上に、いずれかの自尊感情が高 (低) い群にもそれほど自尊感情間の乖離が大きい者が含まれ得

⁵ 本稿において“(自尊感情間の) 不一致”と記述した場合は、先行研究において顕在-潜在的自尊感情のそれぞれの高低を要因とした分析の結果を指しているか、両者のずれの程度には言及せず、差異があることのみを指している。一方で“(自尊感情間の) 乖離”と表記した場合は、両自尊感情間の差の大きさに言及しているものとして、“不一致”と区別している。

るという問題がある。そこで、両自尊感情間の乖離の大きさを直接得点化して検討することが必要であると考えた。顕在-潜在間の自尊感情の乖離が心理的葛藤や強い不快感を引き起こす (Cockerham et al., 2009; Petty et al., 2006) のであれば、乖離の程度が大きいほど PD として表れる様々な不適応の特徴がより強くなると考えられる。

また、Gang et al. (2011) や Vater et al. (2010, 2013) では、それぞれ境界性 PD、自己愛性 PD、回避性 PD について異なる手法で検討を行い、直接的な比較検討がなされていない。否定的自己認知という概念的オーバーラップが見られる (市川・望月, 2014b) これら 3 種の PD と関連する自尊感情の乖離の特徴を検討する際には、同一手法および同一対象者による直接比較を行うことが望ましいといえる。

以上のことから、本研究では顕在的自尊感情と潜在的自尊感情の乖離という観点から境界性 PD、自己愛性 PD、回避性 PD と自尊感情との関連を検討することを目的とする。分析の際には、Vater et al. (2010, 2013) と同様に顕在的-潜在的自尊感情の不一致 (交互作用) と各 PD との関連についても検討し、両自尊感情の交互作用と自尊感情間の乖離の各 PD に対する予測力を比較検討することとした。各 PD に関する仮説は以下の 4 点とした。(a) 顕在的自尊感情が低く、潜在的自尊感情が高い境界性 PD 患者が特に重篤な症状を示すこと (Vater et al., 2010) から、境界性 PD の程度は潜在的自尊感情が相対的に高いことによる自尊感情間の乖離の大きさと関連する。(b-1) 自己愛性 PD が潜在的な恥の強さと関連すること (Ritter et al., 2014) から、自己愛性 PD の程度は顕在的自尊感情が相対的に高いことによる自尊感情間の乖離の大きさと関連する。(b-2 : b-1 の対立仮説) 自己愛性 PD の症状が、顕在的自尊感情が低く、かつ潜在的自尊感情が高い場合により強いこと (Vater et al., 2013) から、自己愛性 PD の程度は潜在的自尊感情が相対的に高いことによる自尊感情間の乖離の大きさと関連する。(c) 回避性 PD の特徴を示す個人が、顕在的自尊感情の低さを示す一方で潜在的自尊感情は健常群と差がないこと (Gang et al., 2011) から、回避性 PD の程度は潜在的自尊感情が相対的に高いことによる自尊感情間の乖離の大きさと関連する。

Haslam (2003) などの先行研究において上記の PD の臨床群と健常群間の量的な連続性が実証的・統計的に示されており、市川・望月 (2013) においては本邦の大学生においても境界性 PD・回避性 PD の程度が正規分布することが示されている。これらのことから、一般大学生を対象としたアナログ研究による検討が可能であると考え、本研究では大学生を対象とした。以降、各個人が示す PD の特徴の程度を“PD 傾向”とする。

方 法

研究参加者 関東地方にある国立大学の大学生および大学院生 85 名 (男性 34 名、女性 51 名 : 平均年齢 20.5 歳, $SD = 2.23$) であった。

実施時期 2012 年 5 月から 7 月に実施した。

手続き 参加者は、心理学の講義中あるいは個別に募集し、任意での参加を求めた。質問紙による顕在的自尊感情および PD 傾向の測定と IAT (Greenwald et al., 1998) による潜在的自尊感情の測定を、実験室にて個別に行った。

手続き 刺激の提示および IAT による反応時間の記録には、デスクトップ型パーソナルコンピュータ (DELL 社製 OPTIPLEX390, Microsoft Windows 7) と 17 インチ TFT 液晶ディスプレイ (DELL 社製) を使用し、ソフトウェアには Inquisit 3.0 (Millisecond 社) を使用した。参加者は、研究に関する説明を受けた後に、IAT 課題の実施方法の説明を受け、コンピュータ上で 3 種の IAT 課題を実施した。その後、質問紙に回答した。

IAT の手続き IAT 課題は、PC 画面上にランダムに提示される刺激語を、画面の左右に提示された 2 種類の概念カテゴリー (自分-他者) および 2 種類の属性カテゴリー (快-不快) のうち該当するカテゴリーにできる限り早く分類するものである。ブロック構成および試行数は Greenwald et al. (1998) に依拠した。課題は全 7 ブロックから構成され、第 4・第 7 ブロックがテスト施行 (各 40 施行)、他の 5 ブロックが練習施行 (各 20 施行) であった。回答にはキーボードの E キー (左) と I キー (右) を使用し、反応に要した時間を記録した。

刺激語 Greenwald & Farnham (2000) の自尊感情 IAT の刺激語を用いた。

質問紙で使用した尺度 (a) SCID-II 人格質問票 (First, Gibbon, Spitzer, Williams, & Benjamin, 1997 高橋監訳 2002) : DSM-IV II 軸人格障害のための構造化面接 (Structured Clinical Interview for DSM-IV axis II personality disorders: SCID-II, First et al., 1997 高橋監訳 2002) の人格質問票における各 PD に関する質問項目のうち、境界性 PD に関する 15 項目、自己愛性 PD に関する 17 項目、回避性 PD に関する 7 項目を使用した。SCID-II 人格質問票の項目は DSM の診断基準に沿って作成されているため、PD の診断を最もよく予測し (Germans, Van Heck, Masthoff, Trompenaars, & Hodiament, 2010)、同一対象者に対して複数の PD 特性を一度に測定する際に有用である。これまでに、一般大学生を対象とした PD のアナログ研究においても、PD 特性の程度の把握のために SCID-II 人格質問票の項目を自己記入式質問紙法で用いた先行研究が行われている (Bowles, Armitage, Drabble, & Meyer, 2013; 市川・望月,

Table 1
各得点の記述統計量

	得点範囲	平均値	標準偏差	α 係数
境界性 PD 傾向	15 — 75	35.64	10.26	.80
自己愛性 PD 傾向	17 — 85	37.71	7.86	.69
回避性 PD 傾向	7 — 35	20.29	5.88	.72
顕在的自尊感情	10 — 40	27.04	6.28	.87
潜在的自尊感情		0.54	0.33	
自尊感情差得点		0.00	1.33	

Table 2
各得点間の相関係数

	自己愛性 PD 傾向	回避性 PD 傾向	顕在的自尊感情	潜在的自尊感情	自尊感情差得点
境界性 PD 傾向	.15	.52 ***	-.47 ***	-.13	-.26 *
自己愛性 PD 傾向		-.05	.17	-.12	.21
回避性 PD 傾向			-.75 ***	-.04	-.54 ***
顕在的自尊感情				.12	.66 ***
潜在的自尊感情					-.66 ***

*** $p < .001$, * $p < .05$

2014a)。また、SCID-II 人格質問票における各 PD に関する項目の内的一貫性 (Ullrich, Deasy, Smith, Johnson, Clarke, Broughton, & Coid, 2008) や、自己評定と面接者評定との間の十分な一致率も確認されている (Germans et al., 2010)。SCID-II 人格質問票は、各項目に関する症状の有無を“はい”“いいえ”の 2 件法で尋ねるものである。しかし、本研究では各項目に関する個人差をより細かく測定するために、この質問票をアナログ研究で用いた Bowles et al. (2013) や市川・望月 (2013) などを参考に、各項目について“はい”“どちらかといえはい”“どちらともいえない”“どちらかといえはい”“いいえ”の 5 件法で回答を求めた。(b) ローゼンバーク自尊感情尺度日本語版 (桜井, 2000) : Rosenberg (1965) の self-esteem 尺度の邦訳版である。10 項目それぞれについて、桜井 (2000) に準じて“いいえ”から“はい”までの 4 件法で回答を求めた。

分析 本研究の分析には IBM SPSS Statistics 19.0 および HAD12.216 (清水・村山・大坊, 2006) を用いた。

結 果

得点化および記述統計

PD 傾向得点 各 PD に関する項目の内的一貫性を確認するために、それぞれ α 係数を算出した。境界性 PD 傾向は $\alpha = .80$ 、回避性 PD 傾向は $\alpha = .72$ と概ね良好な内的一貫性が確認されたが、自己愛性 PD 傾向は $\alpha = .69$ と若干低い値が得られた。DSM-5 (American Psychiatric Association, 2013 高橋・大野監訳 2014) では、各 PD はそれぞれの診断基準のうち既定の数の基準が

満たされることで行われる。つまり、ある PD の診断を受けていても、その PD の診断基準をすべて満たしているとは限らないため、各 PD に関する全診断基準の内的一貫性はさほど問題ではないと考えられる。また、先行研究との結果の比較を行うためにも、項目の削除は不適当であると判断した。そこで、各 PD について項目得点をそれぞれ加算し、境界性 PD 傾向得点、自己愛性 PD 傾向得点、回避性 PD 傾向得点として以下の分析に用いた。

顕在的自尊感情得点 逆転項目を処理した上で自尊感情尺度の α 係数を算出したところ、 $\alpha = .87$ と十分な内的一貫性が確認された。そこで、項目得点を単純加算して尺度得点を算出し、顕在的自尊感情得点とした。

潜在的自尊感情得点 Greenwald, Nosek, & Banaji (2003) に従って IAT 得点 (D スコア) を算出し、潜在的自尊感情得点とした。この得点が高いほど、潜在的自尊感情が高いことを示す。

以上の各得点における記述統計量および信頼性係数を Table 1 に示す。また、各得点間の相関係数行列を Table 2 に示す。Table 2 より、顕在的自尊感情は境界性 PD 傾向および回避性 PD 傾向とは中程度以上の負の相関を示したが (順に、 $r = -.47, -.75, ps < .001$)、自己愛性 PD 傾向とは弱い正の相関に止まった ($r = .17, ns$)。潜在的自尊感情はいずれの PD 傾向ともほぼ無相関であった。

顕在的-潜在的自尊感情間の交互作用と各 PD 傾向との関連

顕在的自尊感情得点と潜在的自尊感情得点の交互作

Table 3
 顕在的-潜在的自尊感情間の交互作用に関する階層的重回帰分析の結果

従属変数	Step	独立変数	R^2	ΔR^2	β
境界性 PD 傾向	1	主効果	.23 ***		
		顕在的自尊感情 (a)			-.47 **
		潜在的自尊感情 (b)			-.10
	2	交互作用	.25 ***	.02	
		(a) \times (b)			-.16
自己愛性 PD 傾向	1	主効果	.05		
		顕在的自尊感情 (a)			.18
		潜在的自尊感情 (b)			-.17
	2	交互作用	.06	.02	
		(a) \times (b)			-.14
回避性 PD 傾向	1	主効果	.57 ***		
		顕在的自尊感情 (a)			-.76 ***
		潜在的自尊感情 (b)			.08
	2	交互作用	.59 ***	.02 *	
		(a) \times (b)			.15 *

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

注) 最終ステップにおける β の値を記載。

用が各 PD 傾向に与える影響を検討するために, Vater et al. (2010, 2013) と同様の階層的重回帰分析 (強制投入法) を行った。独立変数には, 第 1 ステップで両自尊感情得点を中心化した値を投入し, 第 2 ステップで交互作用項を投入した。従属変数は, 各 PD 傾向得点とした。分析の結果を Table 3 に示す。検定の結果, 従属変数を回避性 PD 傾向得点とした際に, 顕在的自尊感情の標準偏回帰係数 ($\beta = -.76, t = -10.55, p < .001$) と, 第 2 ステップの説明率, 顕在的-潜在的自尊感情間の交互作用項投入による R^2 の変化量および交互作用項の標準偏回帰係数 ($R^2 = .59, p < .001$; $\Delta R^2 = .02, p < .05$; $\beta = .15, t = 2.04, p < .05$) が 5% 水準で有意であった。単純傾斜検定の結果 (Figure 1),

潜在的自尊感情が高い場合 (+1SD)・低い場合 (-1SD) における顕在的自尊感情の単純傾斜がそれぞれ有意であったが (順に, $B = -.62, t = -6.32, p < .001$; $B = -.89, t = -9.34, p < .001$), 顕在的自尊感情の $\pm 1SD$ における潜在的自尊感情の単純傾斜はいずれも有意ではなかった。この結果は, 回避性 PD 傾向に対する顕在的自尊感情の負の主効果の強さが反映されたものであり, いずれの自尊感情による調整効果も見られなかったといえる。境界性 PD 傾向および自己愛性 PD 傾向については, 顕在的-潜在的自尊感情間の交互作用項投入による R^2 の変化量は有意ではなかった (いずれも $\Delta R^2 = .02, ns$)。

顕在的-潜在的自尊感情間の乖離と各 PD 傾向との関連

各対象者について, 顕在・潜在それぞれの自尊感情得点を z 得点化し, 顕在的自尊感情得点の z 得点から潜在的自尊感情得点の z 得点を引いて, 顕在的-潜在的自尊感情の差得点を算出した ($M = 0.00, SD = 1.33$)⁶。差得点が正の値であれば顕在的自尊感情の方が相対的に高いこと (Implicit < Explicit) を, 差得点が負の値

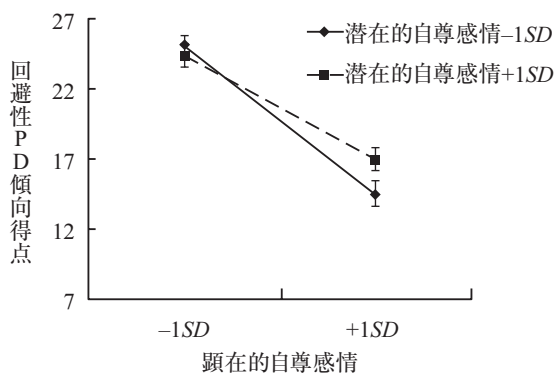


Figure 1. 回避性 PD 傾向に関する単純傾斜検定の結果
 注) エラーバーは標準誤差を表す。

⁶ IAT の D スコアの分布形状は歪度 $S_k = -0.06$, 尖度 $K_u = -0.36$ と目立った歪みはなく, 正規性の検定 (Shapiro-Wilk 検定) においても $W = .98$ ($p = .37$) と分布の正規性が確認された。顕在的自尊感情得点についても, Shapiro-Wilk 検定の結果 ($W = .97, p = .06$) から正規性が確認された。さらにこれらの得点の相関は $r = .12$ (ns) と弱かったため, 両得点を標準化して差得点を算出することは統計的に妥当であると判断した。

Table 4
顕在的-潜在的自尊感情間の差得点に関する階層的重回帰分析の結果

従属変数	Step	独立変数	R^2	ΔR^2	β
境界性 PD 傾向	1	主効果	.04		
		差得点の絶対値 (a)			.34 *
		差の方向 (b)			-.12
	2	交互作用	.09 *	.05 *	
		(a) \times (b)			-.30 *
自己愛性 PD 傾向	1	主効果	.02		
		差得点の絶対値 (a)			-.11
		差の方向 (b)			.12
	2	交互作用	.06	.05*	
		(a) \times (b)			.28 *
回避性 PD 傾向	1	主効果	.18 ***		
		差得点の絶対値 (a)			.25 *
		差の方向 (b)			-.43 ***
	2	交互作用	.30 ***	.12 ***	
		(a) \times (b)			-.44 ***

*** $p < .001$, * $p < .05$

注) 最終ステップにおける β の値を記載。差の方向は, Implicit < Explicit の場合に +1, Implicit > Explicit の場合に -1 とするエフェクト・コーディング。

であれば潜在的自尊感情の方が相対的に高いこと (Implicit > Explicit) を示す。次に、差得点の絶対値を算出し、差の方向によってエフェクト・コーディングを行った (Implicit < Explicit 群: +1; Implicit > Explicit 群: -1)。

差得点の絶対値の大きさと差の方向およびこれらの交互作用と各 PD 傾向との関連を検討するために、階層的重回帰分析 (強制投入法) を行った。独立変数には、第 1 ステップで差得点の絶対値を中心化した値と差の方向によるエフェクト・コードを投入し、第 2 ス

テップでこれらの交互作用項を投入した。従属変数は、各 PD 傾向得点とした。分析の結果を Table 4 に示す。

検定の結果、境界性 PD 傾向および回避性 PD 傾向について、第 2 ステップの説明率、交互作用項投入による R^2 の変化量および交互作用項の標準偏回帰係数が 5% 水準で有意であった (境界性: $R^2 = .09$, $p < .05$; $\Delta R^2 = .05$, $p < .05$; $\beta = -.30$, $t = -2.20$, $p < .05$; 回避性: $R^2 = .30$, $p < .001$; $\Delta R^2 = .12$, $p < .001$; $\beta = -.44$, $t = -3.64$, $p < .001$)。単純傾斜検定の結果、境界性 PD 傾向得点については Implicit > Explicit 群における差得点の絶

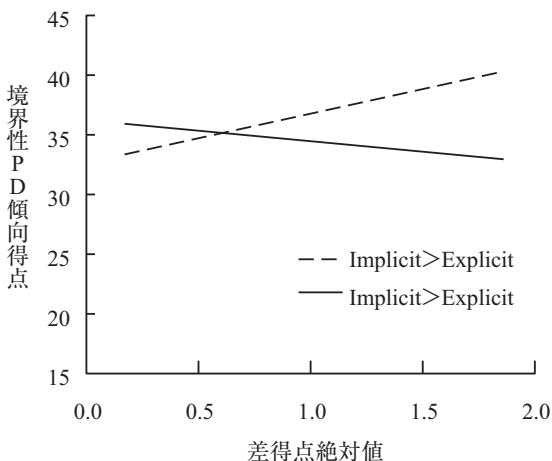


Figure 2. 境界性 PD 傾向に関する単純傾斜検定の結果

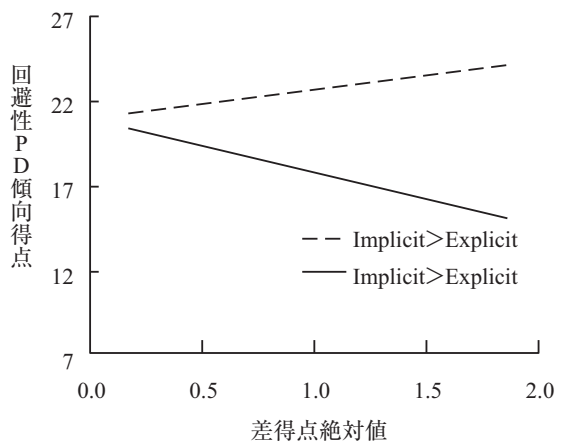


Figure 3. 回避性 PD 傾向に関する単純傾斜検定の結果

対値の単純傾斜が有意であった ($B = .34, t = 2.49, p < .05$) (Figure 2)。したがって、潜在的自尊感情が相対的に高く、さらに顕在的-潜在的自尊感情間の乖離が大きいほど境界性 PD 傾向が高くなるといえる。回避性 PD 傾向得点については、Implicit < Explicit 群、Implicit > Explicit 群のいずれにおいても差得点の絶対値の単純傾斜が有意であった (順に、 $B = -.45, t = -3.02, p < .01$; $B = .25, t = 2.06, p < .05$) (Figure 3)。したがって、顕在的自尊感情が相対的に高い場合は顕在的-潜在的自尊感情間の乖離が大きいほど回避性 PD 傾向が低くなり、潜在的自尊感情が相対的に高い場合は顕在的-潜在的自尊感情間の乖離が大きいほど回避性 PD 傾向が高くなるといえる。自己愛性 PD 傾向に関する分析では、第 1 ステップ・第 2 ステップともに回帰モデルは有意ではなかった (順に、 $R^2 = .02, F(2, 82) = 0.70, ns$; $R^2 = .06, F(1, 81) = 1.81, ns$)。

考 察

本研究の目的は、顕在的自尊感情と潜在的自尊感情の乖離と境界性 PD、自己愛性 PD、回避性 PD との関連を検討することであった。その際、先行研究 (Vater et al., 2010, 2013) において示されている PD と顕在-潜在間の自尊感情の不一致との関連についても検討し、比較した。

相関分析の結果から、境界性 PD 傾向と回避性 PD 傾向は顕在的自尊感情と負の関連が示された。この結果は Watson (1998) などの先行研究と一致しており、これらの PD 傾向が意識された否定的な自己概念と関連することが確認された。その一方で、自己愛性 PD 傾向は顕在的自尊感情との有意な相関が見られなかった。また、いずれの PD 傾向も潜在的自尊感情とは有意な相関を示さなかった。したがって、境界性 PD 傾向・回避性 PD 傾向は顕在的自尊感情と潜在的自尊感情では異なる関連性を有しており、顕在化されている否定的自己概念の背景に否定的でない潜在的な自己概念が存在することが示唆された。しかし、自己愛性 PD 傾向はいずれの自尊感情とも有意な相関を示さず、不適応的な自己愛の背景にある自尊感情の特徴は示されなかった。

先行研究 (Vater et al., 2010, 2013) と同様に、顕在的-潜在的自尊感情の交互作用と各 PD 傾向との関連を検討するために階層的重回帰分析を行った。しかし、境界性 PD 傾向と自己愛性 PD 傾向について、先行研究 (Vater et al., 2010, 2013) と同様の結果は得られず、交互作用は有意ではなかった。先行研究と異なる結果が得られた要因として、対象者の違いが挙げられる。先行研究は臨床群を対象としており、本研究では大学生を対象としたアナログ研究を行った。Vater et al. (2010) において顕在的-潜在的自尊感情の交互作用が境界性 PD の全般的症状の重篤さを予測するものであ

ると示唆されたことから、顕在的-潜在的自尊感情の交互作用は臨床水準の著しい機能障害を予測するものであり、アナログ研究では十分に検出できなかった可能性が考えられる。PD のアナログ研究は DSM-IV の施行以来数多く行われてきたが、臨床群における重症度の高い PD 患者と健常群における高 PD 傾向者の間の差異を明らかにし、アナログ研究の適用可能範囲を明確にすることが今後必要であるといえる。

次に、4 点の仮説について検証する。仮説 (a) は、境界性 PD 傾向は潜在的自尊感情が相対的に高いことによる自尊感情間の乖離の大きさと関連することであった。差得点に関する階層的重回帰分析の結果 (Table 4) から、境界性 PD 傾向得点は Implicit > Explicit 群においては絶対値が大きいほど高いことが示された。つまり、潜在的自尊感情が相対的に高く、また顕在-潜在間の自尊感情の乖離が大きいほど境界性 PD の傾向が強くなることが示され、仮説は支持された。顕在的-潜在的自尊感情の交互作用に関する階層的重回帰分析 (Table 3) においては、顕在的自尊感情のみが境界性 PD 傾向に対して負の主効果を示していたことから、意識された自己概念が否定的である一方で潜在的には否定的でない自己概念を有することが境界性 PD の症状に寄与するといえる。境界性 PD 者は未熟な防衛機制を多く示すことが明らかにされており (Zanarini, Weingeroff, & Frankenburg, 2009)、また顕在-潜在間の自尊感情が乖離している者はその不一致を解消するために防衛的反応を示す (Jordan, Spencer, Zanna, Hoshino-Browne, & Correll, 2003) という知見もある。したがって、境界性 PD 傾向が高い個人は、潜在的に存在する否定的でない自己概念に合致しない、意識された否定的な自己概念に対して強い防衛的反応を示していると考えられる。そして、両自己概念間の乖離が大きいため、その乖離を解消するための防衛的反応には多大なるエネルギーを要し、無意識的側面も関与していることから未熟な防衛機制も多用されるため、不安定で激しい対人関係や種々の衝動的な行動が引き起こされると考えられる。

仮説 (b-1) は、自己愛性 PD 傾向は顕在的自尊感情が相対的に高いことによる自尊感情間の乖離の大きさと関連することであった。また、対立仮説である仮説 (b-2) は、自己愛性 PD の程度は潜在的自尊感情が相対的に高いことによる自尊感情間の乖離の大きさと関連することであった。本研究の結果からは、顕在-潜在間の自尊感情の乖離と自己愛性 PD 傾向との関連は示されず、いずれの仮説も支持されなかった。また、顕在的-潜在的自尊感情の主効果および交互作用 (Table 3) との関連も見られなかったことから、自己愛性 PD 傾向はこれらの自尊感情およびその不一致の観点からは説明されないことが示唆された。自己愛性 PD に関わる誇大性と脆弱な自尊感情 (American

Psychiatric Association, 2013 高橋・大野監訳 2014) については、顕在的-潜在的自尊感情以外の観点から検討を行う必要があるといえる。

仮説 (c) は、回避性 PD 傾向は潜在的自尊感情が相対的に高いことによる自尊感情間の乖離の大きさと関連することであった。階層的重回帰分析の結果 (Table 4) から、回避性 PD 傾向得点は Implicit > Explicit 群においては差得点の絶対値が大きいほど高いことが示された。したがって、潜在的自尊感情が相対的に高く、また顕在-潜在間の自尊感情の乖離が大きいほど回避性 PD 傾向の傾向が強くなるといえ、仮説は支持された。顕在的-潜在的自尊感情の交互作用に関する階層的重回帰分析 (Table 3) においては、顕在的自尊感情のみが回避性 PD 傾向に対して強い負の主効果を示していたことから、否定的でない潜在的自己概念に対して意識された自己概念が強く否定的であることが回避性 PD の症状に寄与するといえる。また、回避性 PD 傾向は、顕在的-潜在的自尊感情の交互作用を検討した階層的重回帰分析においては潜在的自尊感情 $\pm 1SD$ のいずれにおいても顕在的自尊感情の負の単純主効果が見られたのみであった。したがって、回避性 PD 傾向には単なる顕在-潜在間の自尊感情の不一致ではなく、両自尊感情間の乖離が関連しているといえる。回避性 PD は、元より低い自尊感情がさらに傷ついたり、他者の面前で露見したりすることを防ぐために、様々な社会的場面を回避することを主な特徴とする。しかし、その根底には否定的でない自己概念があり、この無意識的な自己概念が傷つくことを恐れているために、セルフ・ハンディキャッピングを用いて否定的な自己概念を意識的に形成し、様々な社会的場面を回避していると考えられる。また、顕在-潜在間の自己概念の乖離が大きいことは、このセルフ・ハンディキャッピングの程度も強いことを表す。したがって、顕在的-潜在的自尊感情間の乖離の大きさが種々の社会的場面をより強固に回避することに寄与しているといえ、この乖離を縮めることが回避性 PD の症状の緩和に有効であると考えられる。

また、回避性 PD 傾向は、Implicit < Explicit 群においては差得点の絶対値が大きいほど低くなることも示された。つまり、潜在的自尊感情に比して顕在的自尊感情が高い個人ほど回避性 PD の特徴が見られないといえる。これには顕在的自尊感情と回避性 PD 傾向の間の強い負の相関が影響していると考えられ、意識された肯定的な自己認知が対人行動を積極的にすることが考えられる。

以上のことから、顕在的-潜在的自尊感情間の乖離は境界性 PD 傾向および回避性 PD 傾向の高さに寄与するものであるといえる。本研究では、Vater et al. (2010, 2013) でも検討されていた顕在-潜在間の自尊感情の不一致と、両自尊感情間の乖離の大きさについ

てそれぞれ分析を行ったことで、自尊感情間の単なる不一致よりもそれらの乖離の大きさが境界性 PD および回避性 PD と関連することを明らかにした。そして、自尊感情間の乖離を小さくすることで、境界性 PD や回避性 PD の症状が緩和される可能性も示された。今後は顕在的-潜在的自尊感情間の乖離の縮小あるいは顕在的自尊感情の向上に対する効果的な介入方法を探ることで、PD の治療に役立つ知見が得られることが期待される。また、境界性 PD と回避性 PD には潜在的自尊感情が相対的に高いことによる乖離の大きさと関連が共通して見られたが、その背景要因は異なることが考えられるため、さらに詳細な検討を行う必要がある。他方、自己愛性 PD と関連する顕在的な誇大的自己概念と潜在的な劣等的自己概念については、本研究とはまた異なる観点からの検討も必要とされる。

本研究の限界点は、自尊感情間の差得点の算出に本研究の対象者における標準化得点を用いたため、結果の一般化が困難な点である。また、顕在的自尊感情と境界性・回避性 PD 傾向との間に強い負の相関が見られたことから、これらの PD 傾向に対する自尊感情間の差得点の効果が顕在的自尊感情に依存していた可能性が否定できない。したがって、今後も同様の検討を重ね、多側面から分析を行い、知見を積み重ねていくことが必要である。

引用文献

- American Psychiatric Association (2013). *Diagnostic and statistical manual of mental disorders* (5th ed.). Washington, DC: American Psychiatric Association.
- (アメリカ精神医学会 高橋 三郎・大野 裕(監訳) (2014). DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル 医学書院)
- Bornstein, R. F., Bianucci, V., Fishman, D. P., & Biars, J. W. (2014). Toward a firmer foundation for DSM-5.1: Domains of impairment in DSM-IV/DSM-5 personality disorders. *Journal of Personality Disorders*, **28**, 212–224.
- Bowles, D. P., Armitage, C. J., Drabble, J., & Meyer, B. (2013). Self-esteem and other-esteem in college students with borderline and avoidant personality disorder features: An experimental vignette study. *Personality and Mental Health*, **7**, 307–319.
- Cockerham, E., Stopa, L., Bell, L., & Gregg, A. (2009). Implicit self-esteem in bulimia nervosa. *Journal of Behavior Therapy and Experimental Psychiatry*, **40**, 265–273.
- 遠藤 由美 (1992). 自己認知と自己評価の関係——重みづけをした理想自己と現実自己の差異スコアからの検討—— 教育心理学研究, **40**, 157–163.
- (Endo, Y. (1992). Personalized standard of self-esteem. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **40**, 157–163.)

- Erikson, E. H. (1950). *Childhood and society*. New York: Norton.
- Erikson, E. H. (1963). *Childhood and society*. 2nd ed. New York: Norton.
- First, M. B., Gibbon, M., Spitzer, R. L., Williams, J. B. W., & Benjamin, L. S. (1997). *Structured clinical interview for DSM-IV axis I personality disorders: SCID-II*. Washington, DC: American Psychiatric Publishing. (ファースト, M. B.・ギボン, M.・スピッツァー, R. L.・ウィリアムズ, J. B. W.・ベンジャミン, L. S. 高橋 三郎 (監訳) (2002). SCID-II—DSM-IV II 軸人格障害のための構造化面接——医学書院)
- 藤井 勉 (2014). 顕在的・潜在的自尊感情の不一致と抑うつ・不安および内集団ひいきの関連 心理学研究, **85**, 93-99.
- (Fujii, T. (2014). Relationships between explicit/implicit self-esteem discrepancy and measures of depression, loneliness, and in-group favoritism. *Japanese Journal of Psychology*, **85**, 93-99.)
- Gang, Y., Fan-Min, Y., Wen-Qing, F., & Ming, K. (2011). The relationships of self-esteem and affect of university students with avoidant personality disorder. *Chinese Mental Health Journal*, **25**, 141-145.
- Germans, S., Van Heck, G. L., Masthoff, E. D., Trompenaars, F. W. J. M., & Hodiament, P. P. G. (2010). Diagnostic efficiency among psychiatric outpatients of a self-report version of a subset of screen items of the Structured Clinical Interview for DSM-IV-TR personality disorders (SCID-II). *Psychological Assessment*, **22**, 945-952.
- Greenwald, A. G., & Banaji, M. R. (1995). Implicit social cognition: Attitudes, self-esteem, and stereotypes. *Psychological Review*, **102**, 4-27.
- Greenwald, A. G., Banaji, M. R., Rudman, L. A., Farnham, S. D., Nosek, B. A., & Mellott, D. S. (2002). A unified theory of implicit attitudes, stereotypes, self-esteem, and self-concept. *Psychological Review*, **109**, 3-25.
- Greenwald, A. G., & Farnham, S. D. (2000). Using the implicit association test to measure self-esteem and self-concept. *Journal of Personality and Social Psychology*, **79**, 1022-1038.
- Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. L. K. (1998). Measuring individual differences in implicit cognition: The implicit association test. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 1464-1480.
- Greenwald, A. G., Nosek, B. A., & Banaji, M. R. (2003). Understanding and using the implicit association test: I. An improved scoring algorithm. *Journal of Personality and Social Psychology*, **85**, 197-216.
- Haslam, N. (2003). The dimensional view of personality disorders: A review of the taxometric evidence. *Clinical Psychology Review*, **23**, 75-93.
- 市川 玲子・望月 聡 (2013). 境界性・依存性・回避性パーソナリティ間のオーバーラップとそれぞれの独自性 パーソナリティ研究, **22**, 131-145.
- (Ichikawa, R., & Mochizuki, S. (2013). The commonalities and specificities among borderline, dependent and avoidant personality. *Japanese Journal of Personality*, **22**, 131-145.)
- 市川 玲子・望月 聡 (2014a). パーソナリティ障害特性と仮想的有能感との関連——有能感の4類型間の比較—— パーソナリティ研究, **23**, 96-100.
- (Ichikawa, R., & Mochizuki, S. (2014a). The relationships between personality disorder traits and assumed competence: Comparison among four types of competence. *Japanese Journal of Personality*, **23**, 96-100.)
- 市川 玲子・望月 聡 (2014b). パーソナリティ障害間の概念的オーバーラップ 筑波大学心理学研究, **48**, 59-69.
- (Ichikawa, R., & Mochizuki, S. (2014b). Conceptual overlaps among personality disorders. *Tsukuba Psychological Research*, **48**, 59-69.)
- 市川 玲子・望月 聡 (2014c). パーソナリティ障害特性と自尊感情の諸側面との関連——変動の大きさおよび随伴性に着目して—— パーソナリティ研究, **23**, 80-90.
- (Ichikawa, R., & Mochizuki, S. (2014c). The relationships of personality disorder traits and some aspects of self-esteem: Focusing on the variability and the contingency. *Japanese Journal of Personality*, **23**, 80-90.)
- Jordan, C. H., Spencer, S. J., Zanna, M. P., Hoshino-Browne, E., & Correll, J. (2003). Secure and defensive high self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, **85**, 969-978.
- Kernis, M. H. (2003). Toward a conceptualization of optimal self-esteem. *Psychological Inquiry*, **14**, 1-26.
- Leary, M. R., & Downs, D. L. (1995). Interpersonal functions of the self-esteem motive: The self-esteem system as a sociometer. In M. H. Kernis (Ed.), *Efficacy, agency, and self-esteem*. New York: Plenum. pp. 123-144.
- Leising, D., Sporberg, D., & Rehbein, D. (2006). Characteristic interpersonal behavior in dependent and avoidant personality disorder can be observed within very short interaction sequences. *Journal of Personality Disorders*, **20**, 319-330.
- Lynum, L. I., Wilberg, T., & Karterud, S. (2008). Self-esteem in patients with borderline and avoidant personality disorders. *Scandinavian Journal of Psychology*, **49**, 469-477.
- McNulty, S. E., & Swann Jr, W. B. (1994). Identity negotiation in roommate relationships: The self as architect and consequence of social reality. *Journal of Personality and Social Psychology*, **67**, 1012-1023.
- 岡部 康成・今野 裕之・岡本 浩一 (2003). 安全確保のための心理特性の潜在的測定の有用性 社会技術研究論文集, **1**, 288-298.
- (Okabe, Y., Konno, H., & Okamoto, K. (2003). Utility of implicit measures of traits assessment for prevention violations. *Sociotechnica*, **1**, 288-298.)
- Petty, R. E., Tormala, Z. L., Briñol, P., & Jarvis, W. B. G. (2006). Implicit ambivalence from attitude change: An exploration of the PAST model. *Journal of Personality and Social Psychology*, **90**, 21-41.
- Ritter, K., Vater, A., Rüschen, N., Schröder-Abé, M., Schütz, A., Fydrich, T., Lammers, C. H., & Roepke, S. (2014).

- Shame in patients with narcissistic personality disorder. *Psychiatry Research*, **215**, 429–437.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Rosenberg, M., Schooler, C., & Schoenbach, C. (1989). Self-esteem and adolescent problems: Modeling reciprocal effects. *American Sociological Review*, **54**, 1004–1018.
- 桜井 茂男 (2000). ローゼンバーク自尊感情尺度日本語版の検討 筑波大学発達臨床心理学研究, **12**, 65–71.
(Sakurai, S. (2000). Investigation of the Japanese version of Rosenberg's self-esteem scale. *Bulletin of Tsukuba Developmental and Clinical Psychology*, **12**, 65–71.)
- Sedikides, C., Rudich, E. A., Gregg, A. P., Kumashiro, M., & Rusbul, C. (2004). Are normal narcissists psychologically healthy?: Self-esteem matters. *Journal of Personality and Social Psychology*, **87**, 400–416.
- 清水 裕士・村山 綾・大坊 郁夫 (2006). 集団コミュニケーションにおける相互依存性の分析 (1)——コミュニケーションデータへの階層的データ分析の適用—— 電子情報通信学会技術研究報告, **106** (146), 1–6.
(Shimizu, H., Murayama, A., & Daibo, I. (2006). Analyzing the interdependence of group communication (1): Application of hierarchical analysis into communication data. *IEICE Technical Report. Human Communication Science*, **106** (146), 1–6.)
- 潮村 公弘・村上 史朗・小林 知博 (2003). 潜在的社会的認知研究の進展—— IAT (Implicit Association Test) への招待—— 信州大学人文科学論集人間情報学科編, **37**, 65–84.
(Shiomura, K., Murakami, F., & Kobayashi, C. (2003). Advances in implicit social cognition: Introduction to the IAT (Implicit Association Test) method. *Studies in Humanities: Human Sciences, Shinshu University*, **37**, 65–84.)
- Ullrich, S., Deasy, D., Smith, J., Johnson, B., Clarke, M., Broughton, N., & Coid, J. (2008). Detecting personality disorders in the prison population of England and Wales: Comparing case identification using the SCID-II screen and the SCID-II clinical interview. *Journal of Forensic Psychiatry & Psychology*, **19**, 301–322.
- Vater, A., Ritter, K., Schröder-Abé, M., Schütz, A., Lammers, C. H., Bosson, J. K., & Roepke, S. (2013). When grandiosity and vulnerability collide: Implicit and explicit self-esteem in patients with narcissistic personality disorder. *Journal of Behavior Therapy and Experimental Psychiatry*, **44**, 37–47.
- Vater, A., Schröder-Abé, M., Schütz, A., Lammers, C. H., & Roepke, S. (2010). Discrepancies between explicit and implicit self-esteem are linked to symptom severity in borderline personality disorder. *Journal of Behavior Therapy and Experimental Psychiatry*, **41**, 357–364.
- Watson, D. C. (1998). The relationship of self-esteem, locus of control, and dimensional models to personality disorders. *Journal of Social Behavior and Personality*, **13**, 399–420.
- Wilkinson-Ryan, T., & Westen, D. (2000). Identity disturbance in borderline personality disorder: An empirical investigation. *American Journal of Psychiatry*, **157**, 528–541.
- Wilson, T. D., Lindsey, S., & Schooler, T. Y. (2000). A model of dual attitudes. *Psychological Review*, **107**, 101–126.
- Zanarini, M. C., Weingeroff, J. L., & Frankenburg, F. R. (2009). Defense mechanisms associated with borderline personality disorder. *Journal of Personality Disorders*, **23**, 113–121.
- Zeigler-Hill, V. (2006). Discrepancies between implicit and explicit self-esteem: Implications for narcissism and self-esteem instability. *Journal of Personality*, **74**, 119–144.

—— 2014. 10. 1 受稿, 2015. 5. 16 受理 ——